

大学生の肥瘦の自己評価と体格

青山昌二*

The Relationship between the Self-Image of Ponderosity and the Actual Stature in University Students

by

SHOJI AOYAMA*

Abstract

Based on the 515 male students at the University of Tokyo it was intended to clarify the relationship between their self-image of ponderosity and their actual measurements of height and weight. Following results were obtained:

1. About sixty per cent of them evaluated their stature as slim or slimmer.
2. The regression line obtained from the students' self-image weight over height showed two or three kilograms over than that obtained from their actual measurements.
3. The simplified regression formula of the self-imagined standard stature was $\hat{Y}=0.8(X-90)$. [Proceedings of the Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo, No. 9, 83-96, 1975]

I 研究目的および方法

体格の評価ということは体育における重大な関心事のひとつであることはいままでもないことであり、これまでわが国においてもさまざまな評価方法が考案され、評価が行なわれてきている。たとえば吉田章信は「日本生徒児童年齢別身長別体重表」¹⁾を作成して、性・年齢別および身長1cmごとに体重を甚大・大(大・稍大)・常・小(稍小・小)・甚小の5段階(7段階)に評価しているし、水野忠文は「青少年体力標準表」²⁾において1959年文部省全国調査資料を用いて統計的な回帰の概念を導入して、性・年齢別に身長に対する体重の回帰方程式を算出し、これを基準として身長1cmごとに体重を大から小まで⑤→①の5段階に評価

している。また厚生省は「年齢ごとの身長別正常体重表(1962)」³⁾を作成し、20歳から69歳まで10歳を1まとめにした、それぞれの段階の身長別正常体重値およびふとりすぎ・やせすぎの上下限値を示している。たとえば、吉田章信の18歳男子170cmの体重「平均」値は57.3kgであり、それに相当する水野の「基準値」は59.74kgであり、厚生省の20歳代男子170cmの「平均値」は61.0kgとなっている(表1～表3)。

ところでこれらの値はいずれも現実の体格の統計的分析に依拠して作成されたものであるが、本研究ではこうした現実の体格の統計的分析から出発する体格の評価に対して、視座を転換して、近年身長の伸びが著しく⁴⁾、いわゆる「もやしっ子」型といわれる体つきをした青少年が増えてきたと

* 東京大学教養学部体育研究室 (Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

表1 吉田章信の「日本生徒児童年齢別身長別標準体重表(18-19歳・男)」

身長 cm	体重 kg	大		常			小		甚小
		大	稍大	上限	平均	下限	稍小	小	
155	←58.3	58.2	— 55.8	— 53.4	— 48.5	— 43.7	— 41.2	— 38.8	38.7→
160	←62.1	62.0	— 55.9	— 56.9	— 51.7	— 46.5	— 43.9	— 41.4	41.3→
165	←65.6	65.5	— 62.8	— 60.1	— 54.6	— 49.1	— 46.4	— 43.7	43.6→
170	←68.9	68.8	— 65.9	— 63.0	— 57.3	— 51.6	— 48.7	— 45.8	45.7→
175	←72.1	72.0	— 69.0	— 66.0	— 60.0	— 54.0	— 51.0	— 48.0	47.9→
180	←75.0	74.9	— 71.8	— 68.6	— 62.4	— 56.2	— 53.0	— 49.9	49.8→

表2 水野忠文の「男子18歳身長別体重(kg)」

身長 (cm)	①	②	③		④	⑤
	155	43.12	47.60	49.84	52.08	56.56
160	46.42	50.90	53.14	55.38	59.76	
165	49.72	54.20	56.44	58.68	63.16	
170	53.02	57.50	59.74	61.98	66.46	
175	56.32	60.80	63.04	65.28	69.76	
180	59.62	64.10	66.34	68.58	73.06	

表3 厚生省の「年齢ごとの身長別正常体重表(kg)」
(男子, 1962年)

身長 cm	20~29歳		30~30歳	
	平均値	上下限值	平均値	上下限值
155	51.6	±6.0	51.8	±7.1
160	54.8	±6.4	55.1	±7.6
165	57.9	±6.8	58.4	±8.1
170	61.0	±7.3	61.7	±8.5
175	64.1	±7.5	65.0	±9.0
180	67.3	±7.9	68.3	±9.4

1) 体重の上限値以上の人はふとりすぎ, 下限値以上の人はやせすぎ。

ということが問題にされたりまた一方では肥満児の増加が問題となってきたなかで、青少年自身、本研究では大学生を対象としているが、かれら自身が自分の体格をどのように評価しているであろうか、具体的には自分の体の体重のつき具合をどのように評価しているであろうか、どのような体つきをよしあるいは理想としているであろうか、また自分の身長についてどのような意識をもっているであろうかというかれら自身の意識の事実から出発し、そこからかれらの現実の体格との関連を考察することを通して、そこにどのような体格がひとつの類型あるいは同一な体つきとして描かれているのかということを探ろうとするものである。またこれと上述した諸評価との比較も行なおうとするものである。すなわちかれらの意識にある体つきといったものが現実の体格の諸評価との関連でどのあたりに位置しているものであるのかをみようとするものである。

標本は昭和47年東京大学1年生男子515名(同年入学の約1/6に当る)であり、昭和47年7月に質問紙法により実施した「身体・運動に関する意識」調査のうち、ここでは自分の体の肥瘦の自己評価の項目を中心として分析する。次いでかれらの自己評価段階別に現実の身長および体重値(昭和47年4月実施した健康診断時の記録による)、それぞれの現実の身長のもとでのかれの望んでいる(あるいはかれらの理想とする)体重値、および実現可能不可能は別としたときのかれの望